

今年度の取り組み②

課題解決の糸口を見出すための支援の工夫

紀 村 修 一

1 課題解決の糸口を見出すための支援の工夫とは

子どもは誰しも、技ができないことよりもできることを望んでいる。しかし、どのようにすればよいか分からないと感じている子どもが多い。子どもは、技のポイントを知ること、具体的な課題に気付くことができる。さらに、技のポイントは知っているができないと困り感をもっているとき、仲間とかかわることで、よりよい練習方法を学ぶことができる。このようにして、仲間と共に課題解決の糸口を見出し、運動を繰り返すのである。当然、技のポイントのどこに難しさを感じるかは、一人ひとり違う。だからこそ、よりよい解決方法を仲間と共に考える過程で、運動に親しむ資質・能力の基礎を育成していくことができるのである。

そこで、上記のような主張点を掲げ、以下のような視点で支援を行う。

- 練習方法を工夫している子どもの価値付け
- 技の名称や一連の動きを示した掲示板の活用
- 振り返りの工夫

2 実践事例 いいね、その技①【マット運動】 (第6学年)

(1) 授業の構想

① 本単元で求める子どもの姿

- 自己の課題に気付き、解決しようとマット運動に繰り返し取り組んだり、安定した技を身に付けたりしている（自己の発揮）
- 仲間と技を見合ったり、アドバイスし合ったりする中で、仲間と共に課題解決の糸口を見出し、自他の技を高めようと練習方法を工夫している（かかわり）
- 仲間と助け合ったり、自他の成長を喜んだりし、マット運動における課題解決に向けて、仲間と共に学ぶことのよさを感じている（心の幹）

② 本単元で求める子どもの姿を実現するために

- ア** 練習方法を工夫している子どもを価値付けたり、紹介したりする。そうすることで、課題解決に向けて、練習方法を考えることができるようにする。
- イ** 課題解決に難しさを感じている子どもを見取ったとき、掲示板を見たり、掲示板の前で仲間と気付きを交流したりするように促す。そうすることで、よりよい練習方法を学ぶことができるようにする。
- ウ** 振り返りで、できるようになった技や仲間と考えた練習方法について交流するように促す。そうすることで、課題解決に向けて、仲間と共に学ぶことのよさを感じることができるようになる。

③ 目標

- 自分の力に合った基本的な回転技や倒立技を安定して行うとともに、その発展技を行ったり、それらを繰り返したり、組み合わせたりすることができるようにする。
- 仲間と技を見合ったり、アドバイスし合ったりすることをとおして、仲間と共に体を動かす楽しさや喜びを膨らませることができるようにする。

(2) 子どもの学びの実際 ※波線は資質・能力が発揮された子どもの姿、下線は前述の支援との対応を表す

本単元は、マット運動の特性や魅力にふれ、基本的な回転技や倒立技、その発展技や組み合わせ技を安定して行うことを追究していく学習である。子どもの実態を把握するために事前に行ったアンケート（以下一部抜粋）では、以下のような結果が出た。（男子18名、女子15名）

- ① マット運動が好きです（「はい」…男子8名、女子3名）
- ② マット運動をするのが得意です（「はい」…男子3名、女子2名）

①で「はい」と答えなかった理由には、楽しくない、こわい、上手にできないなどがあった。そこで、改めてマット運動の特性や魅力にふれる必要があると考えた。そして、子どもが自己の課題に気づき、課題解決の糸口を見出しながら運動を繰り返した結果、「マット運動をするのが少しは得意になった」と感じることができるような学習の方向性を定めた。

ここでは、子どもたちが、マット運動に出会い、自己の課題に気付いた第1次、課題解決の糸口を見出していった第2次、第3次の子どもの学びの姿を記す。

① できるようになりたい技が見つかったよ [第1次の学び]

単元の導入では、5年生までに経験している8つの基本的な技^{*1}に取り組んだ（チャレンジマット）。はじめ、マット運動に抵抗感をもち、なかなか取り組むことができない子どもが多かった。そこで、仲間と技を見合ったり、できばえを評価し合ったりしているグループを紹介した。すると、仲間を補助したり、



「チャレンジマット」をする子ども

手本を示したりしながら、夢中になってマット運動に取り組む姿が見られた。【かかわり】その後、子どもは「得意点^{*2}」と「好き点^{*3}」を用いて、それぞれの技についての自己評価をした。振り返りでH児が「前転やブリッジはうまくできたけど、後転やかべ倒立が苦手なことが分かったからがんばりたい」と発言した。この発言をきっかけに、一人ひとりが、自分の得意な技や苦手な技に目を向け、できるようになりたい技を見付けることができたのである。

② 友達のアドバイスのおかげで、技ができたよ [第2次の学び]

第2次第1時では、熱心に大きな前転に取り組んでいたY児に、前転と大きな前転の違いを尋ねた。Y児は「分からない」と答え、Y児と同じグループの子どもも、どこが違うのか分からず困った様子だった。そこで、技の名称や一連の動きを示した掲示板を提示し、それ

*1 前転、開脚前転、後転、開脚後転、川とび、かべ倒立、3点倒立、ブリッジ

*2 「これくらいできるかな」と予想した通りのできばえだったら3点。（最高のできばえだったら5点）

*3 「ふつう」だったら5点。（最高に好きだったら10点）

それぞれの技にはポイントがあることを伝えた。【支援イ】すると、Y児のグループでは、技のポイントを出して確認した後、仲間と技を見合ったり、アドバイスしたりする姿が見られた。【かかわり】そこで、この姿を価値付け、学級全体に紹介した。【支援ア】そうすることで、他のグループも、ただ技をするのではなく、技のポイントを意識して、安定した回転技に取り組むことができるようになった。【自己の発揮】



技のポイントを示した掲示板

第2次第2時では、仲間と共に練習方法を工夫するグループが現れた。以下に、あるグループのやりとりの様子を示す。

N児 どうしたら倒立ブリッジができるようになるのかわからないよ。何かいい方法はない？【かかわり】
 T児 まず、かべ倒立の練習をしたらいいよ。【かかわり】 そうしたら、コツが分かったよ。
 N児 それ、いいね。1回お手本見せてよ。【かかわり】
 T児 うん。こうやってやるんだよ。(かべ倒立後、ブリッジをする)
 N児 やってみる。(かべ倒立後、ブリッジをする) どう？【自己の発揮】
 T児 おお、できてる。できてる。【心の幹】
 S児 もう少しかべを弱く蹴って倒れると、ブリッジがもっと上手にできそうだよ。【かかわり】

T児は、N児のために、実際に試して有効だった練習方法を紹介した。また、S児は、N児の様子を見て、よりよい練習方法を提案した。このようなやりとりをとおして、N児は、課題解決の糸口を見出すことができた。【かかわり】



練習方法の工夫①

練習方法の工夫②

そして、夢中になってマット運動に取り組み、倒立ブリッジができるようになったのである。【自己の発揮】振り返りで、N児に発言を促した。【支援ウ】N児は、「T君とSさんがアドバイスしてくれたから、初めて倒立ブリッジができた。うれしかった」と発言した。【心の幹】この発言をきっかけに、課題解決に向けて、仲間と共に学ぶことのよさを感じ、【心の幹】これまで以上にグループで助け合ってマット運動に取り組む姿が見られた。

③ できる技が増えてきたよ【第3次の学び】

第3次第1時では、まず、「安定した」のイメージを問うた。すると、子どもたちは、美しい、きれい、スムーズと答えた。このイメージを意識しながら、子どもたちは、組み合わせ技に取り組んだ。【自己の発揮】そんな中、W児のグループは、技①から技②へ移る際、技と技の「つなぎ」を工夫する姿が見られた。そこで、全体を集め、W児に演示するように促した。【支援ア】以下は、そのときの様子である。

教師 何と何を組み合わせたのですか？
 W児 前転と後転です。
 教師 やってみてください。
 U児 (W児の演示後) あ、クロス。
 教師 ん？クロスって何？
 U児 前転をし終わるとき、足をクロスして、スムーズに後転に移れるようにしていた。
 児童 (大人数が) 確かに。
 教師 W君、どうですか？
 W児 そうです。
 教師 技と技の「つなぎ」も工夫することができそうですね。

この場面で、W児に、「つなぎ」を工夫したパターンと工夫しないパターンを演示するように促し、子どもたちに比較させた。すると、技の美しさに大きな違いがあることに気付いた。このことにより、子どもたちは、安定した組み合わせ技をするためには、「つなぎ」が大切だと知ったのである。



「つなぎ」の工夫（足クロス）

第3次第2時では、O児が、開脚前転と後転倒立の安定した組み合わせ技を行うことに難しさを感じていた。そこで、グループみんなで掲示板に行き、技のポイントを確認してくるように促した。



「つなぎ」の工夫（ジャンプ&足クロス）

【支援イ】仲間と技を見合ったり、アドバイスし合ったりしたO児は、後転倒立に入る前の勢いが足りないことに気付いた。さらに、前時のW児の「つなぎ」を思い出し、仲間と共にオリジナルの「つなぎ」を創り出すことができた（開脚前転後の開いた足をジャンプしながら、足をクロスさせて着地する。その後、反時計回りに回りながらクロスした足を戻し、後転倒立をする）。振り返りで、O児に発言を促した。【支援ウ】O児は、できるようになった組み合わせ技を披露し、みんなから称賛され、満足した様子だった。【心の幹】



発展技の組み合わせ（倒立前転→側転）

第3次第3時では、進んで発展技を組み合わせたり、組み合わせ技を仲間とシンクロさせたりする子どもの姿が見られた。また、単元を通して体育館中央に設置していた「発表マット」で、できるようになった技を見合い、【かかわり】自他の成長を喜ぶ子どもの姿も増えてきた。【心の幹】このように子どもは、マット運動の特性や魅力にふれ、自他の技を高めようと練習方法を工夫したり、【かかわり】仲間と共に学ぶことのよさを感じたりすることができた【心の幹】のである。



時間差シンクロ（前転→とび前転）

3 実践を振り返って

本実践では、練習方法を工夫している子どもへの価値付けや掲示板の活用といった支援が有効であったと考える。なぜなら、子どもが、マット運動の特性や魅力にふれ、自己の課題に気付き、解決の糸口を見出しながら運動を繰り返す姿が見られたからである。さらには、課題解決に向けて、仲間と共に学ぶことのよさを感じることができた子どもも現れた。



掲示板の活用

第3次では、組み合わせ技ではなく、1つの技の練習を繰り返す子どもがいた。理由を尋ねると、「組み合わせたいが、まだ1つ1つの技ができないから」と答えた。つまり、技能が十分に身に付いていなかったのだ。今後は、指導計画の見直しを図り、子どもたち一人ひとりが、運動に親しむ資質・能力の基礎を育成していくことができるような授業の在り方について研究を進めていきたい。